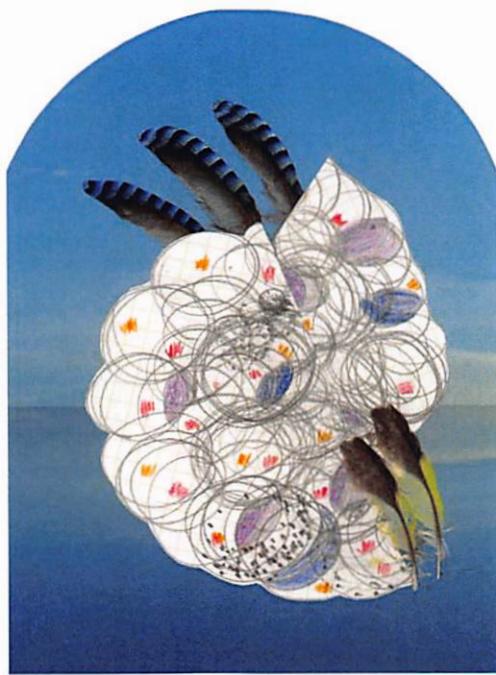


地中海

MARE MEDITERRANEUM

2021. 9



令和3年9月1日発行(毎月1回1日発行)第69巻第9号

No.760

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものと同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

一〇二一年 九月号 (通巻七六〇号)

香川進の生きものの歌 35
私と短歌との出会い (229)

田土成彦 15
角田玲子 19

◇今月の二十首詠……何处に住む、如何に住む 坂上直美 2

◇秋のアンソロジー 「言の葉の宝」
遊覧寄港 <リトミックの朝>

上原ケイ子 89
御代田澄江 50

■作品[A] 養学登志子・横田敏子他 横田美穂子他

安田明子他 山川弘美他

佐々木のり子他 佐々木のり子他

A C B A

■オリーブ集 設楽まゆみ・杉浦詩子 丸山紀代子・北浜玲子

34 16 44

◇今月の二人

久我田鶴子・選

椎名恒治・椎名恒治

34

久我田鶴子・選 関根榮子・山下雅子・田土成彦

追悼文 磯田ひさ子・三浦好博・永塚節子

34

久我田鶴子・選 関根和美・小川美智子

34

久我田鶴子・選 関根榮子・山下雅子・田土成彦

34

久我田鶴子・選 今月の二人・作品評

18

久我田鶴子・選 最近の歌誌より

67

久我田鶴子・選 【編集】田土成彦

67

久我田鶴子・選 得票結果発表

67

久我田鶴子・選 班別・一首評、及び得票一覧

67

久我田鶴子・選 総評 <独自性のある歌>

67

(表紙デザイン) *Lazurine*

■七月号作品批評 A 小野雅子・藤澤元子

90

B 神田鈴子・許田邦子

113

C 石田明彦

52

オリーブ集・福光敬子

90

久我田鶴子・選

113

岩井久美子・村上 旭

52

木村文子

42

■歌壇月旦 十年目の河野裕子論

113

高尾恭子

52

■送風塔

42

習志野グループ・三浦好博

42

木村文子

42

■シルクロード・カフェ

42

【責任編集】木村文子

42

香川進の生きものの歌

35

何処に住む、如何に住む

坂上 直美

ヴェランダに朝日を浴びて深呼吸今日一日も生きねばならぬ

ハンディある子どもも大事に育ていし縄文遺跡人々の暮らし

「ゲーム見て人を殺してみたかった」なぜ？なぜ？君は実行した！

人間に殺人因子があるならば遺伝子操作で消せと思うが

捕まつたミナミジサイチヨウ故郷のアフリカの空へ放しておやり

森も山も焼けて砂漠と変わりゆくコアラも人もただ惑うのみ

夜の闇に不気味な光火碎流燃ゆるにまかせ人はただ逃ぐ

川べりの家もよしとは思えども「岸辺のアルバム」忘れがたくて

昭和二十六年生まれ。
天平グループ所属。

歌集に「inch (イッヒ)」がある。

地上にはもはや我らの住処なしウイルスどもの跳梁跋扈

来世紀我らの家は三種類 地中・海中・天上の家

我らの日衰えゆくは太陽の光あまりに眩しきがゆえ

太陽が滅びるときに人類はどうするだろう人類が先か？

地上にはもはや我らの土地はなし宇宙船ノア天に羽ばたく

我らが祖海より陸に上りゆく我らは帰る祖先の海へ

海底に我ら帰らばその眼やがて消えゆくかなしきことか

海底に我ら住まえば「新参」と笑うであろうシーラカンスが

海底に都市を造らば大通りダイオウイカが通りゆくらん

隣人をクラゲとなして楽しまん海に漂う暮らしもよからん

海底に未来世紀の家ありてリュウグウノツカイ庭を泳げる

夜となればわれも小さき灯をともすここに暮らすと窓より知らす

作品 A

養学登志子

薬壺

・凌

薬師如来左手に持たるる薬壺あまねしこの世を救わむための
やまなみの回より忍竜出で来るやも烈しき電光みじろがす見つむ
籠居の出窓に大小花瓶置きあれこれの花葉ものも並べて
今朝は新茶グラスに注げばさみどりに何家か知らぬ金の紋章
菖蒲苑とび石伝い橋伝いおおよそ古代の名を戴きて
濃紫を櫻と立たせて杜若風の向きにて噴水の霧
薬師さまの汲みて尽きせぬ壺ならむに何ぞわれらの咎の越えいぬ

横田敏子

紫陽花

・福

「おはよう」と声はずませて友の来る溢るるほどの紫陽花抱え

何色と言葉にできぬ紫陽花の色も形も千差万別

玄関に尉に居間に床の間に紫陽花活けてどこも虹色

朝から雨の予報は外れたり空耳かと聴くうぐいすの声

キッチンの窓を開ければさわさわとはつ夏匂う風の入りくる
半夏生の白き花穂と白き葉になぜか惹かれぬどこか怪しく

胃が少し疲れ氣味なり今日の雨音なく降りて心安らぐ

吉永惟昭

土石流

・熊

大水害 起きねば済まぬ日の本の梅雨という季の重たかるなり
山を背に海に沿いたる安らぎの湯の街熱海と思いおりしに
雨降れど往々交う人も平常に土石流など夢のまた夢
この動画見せつけらるる破碎力如何に予知して逃げればいいのか
土石流家押し潰し下へ海へ奔りゆくなり堰きあえぬ間に
跡見れば惨憺の極 不明者の捜索続く泥濘の中
また辛き爪痕残し梅雨明けか仰ぐに仄か鬱の毘天

山下雅子

底ばかり

・習

むさし野のさくら耀う彼岸会に花のあなたへ昇天し給う
むさし野より師を習志野に迎えたり歌を好めど歌知らぬわれら
うた知らぬわれらに篤き師の教えとなりて底ばかりせり
自分の歌愛さないでどうすると鉄槌下さるわが宝なり
力ある低き声のひびきくる歌はこころぞこころを詠めど
月々の篤き卒直なる教え今じんわりと発酵つづく
小ぶりなるガラスの灰皿窓の辺に十年一日師の紫煙恋う

山野幸司 ブール

・沖

梅本武義

わが里

・羊

こともなき日常なれどあふれる子らの歓声わが背を押せり

田を起こすトラクターに乗る老いのわれ生き生きあおぐ茜の空を

指を折り数え足し算一年生得意満面先生気分

木の花の絶えざる庭をゆっくりと時を歩めり猫の親分

小走りに子どもら帰る道の端に小さな花も力々と揺れおり

雨は止みブールの時間子どもらの声は大きく蝉とかさなる

アジサイの雨に打たれて色あらたカタツムリは葉脈の上

山本孟

朝な夕な

・大

大浪美雪

虫偏

・森

幽冥の住みここちいかが一周忌梅雨雲の奥星はきらめく

朝菜夕菜いのちの糧を調理せんと雨の日濡れてヘルパーの来る

犬猫の命の果てまでわが齡かなはで銅はず独り居の居間

歌会のなきさびしさに威書より短歌の出合ひを楽しむ家居

コロナ禍を逆手に取りて『源氏』より「若紫」の訳をしてみむ

洗濯機静かになりぬわれを待つ濡れてからまる不定形のもの

普賢岳・東北震災にさだまさし十年かかさぬ励ましの歌

磯田ひさ子

梶花

・森

奥田陽子

皐月

・羊

墨田川花火大会コロナ禍に二年続きた中止決定

大曲生れのタクシーの運転手「墨田の花火なんざあおもちやよ」運転手の自慢の花火見届けむ晴れて自由に行けるあかつき行きたしと願へど叶はぬ歳月を経て七十代みづから歩む

美術館へ入るに予約が必要とコロナ禍といへ興を削がる

金持ちの豪奢な家などつまらぬと夫の言葉に少し傾く

川釣りに行きたる夫の土産とぞ根ごと掘りたる梶花一本

妹に野菜持ち行きわが里の今と昔を語りて飽きず
七歳の違いで見たる半世紀前のわが里人の関係
人は減り放棄田増えて駄増えわが里に見る日本衰退
山鯨とは肉のこと捕るでなく侵入防止に漁網張り行く
螢飛ぶ小川の辺自動車停め楽しみ居れば猪が来る
檻戻の横を往き交う猪に負けを認めて守るほか無し
宝くじ十億円が当たればと里の放棄田見渡し思う

青嵐のひと日の夕べつきつぎと虫偏にあふ蛇 蛙 虹
二重の虹結べるやうに稻妻は外より内へと光走らす
重きもの落つる水音 潟川に緑の顔の牛蛙座す
こやつめか昼夜わかつたず野太くもビブラートを利かせる蛙は
溝川の流れの中に牛蛙二匹のをりぬ背中合はせに
溝川に居座る蛙を少しさけ小さき魚は水輪つくれり
ひとかかへほどに育ちし芍薬の夕かたまけて花を閉ぢゆく

・羊

小野雅子 梅雨

・羊

コロナ禍の梅雨のあしたの初詣おみくじはまたいのもの 小吉
身構へて暮らせどけふは雨降らず洗濯物は外干しのまま
これから咲く松葉ばたんに白き花まじるを知れば心あかるむ
通るみな足をとめ眺めゆく遊歩道の桜のそば
送迎の「送」のバスゆき雨に濡るるこの一日も暮れゆかむとす
めぐりくるを疑はざれば春の日にまた九月にと言ひ別れきぬ
地中ふかく素数の年を数へるセミの頭脳よヒトを凌きて

神田鈴子 オープン

・大

三十年を働きくればオープンの命尽きしか五月尽日
あへぎつ時々止まるをくり返し遂に動きを止めしオープン
目の前のゴミ収集車にオープンがぱりぱり碎かれ呑み込まれゆく
オープンのこの終焉に合はせしかわが右腕に痛みが走る
四十余年ケーキを作り続けたる右手が効かぬ指が動かぬ
梅雨空に孫子集ふは三月ぶり早やめぐり来る姑三十三回忌
二年後に夫の三十三回忌紫陽花はまた藍深めるむ

菊地栄子 梅雨入り

・湾

真田丸のバイオリンの音コキコキと奏でてはじむ歯磨きのとき
小鳥らは知るや知らずや道端の小さき葉の実熟れて黒ずむ
むらさきを引き立て招ける石楠花か歩みはまたも右へ逸れ行く
バス待てる時間を惜しみ踏み入りし奥州山道新緑深き
足るを知るミツバチなりやエゴノキの乏しき花を巡りて止まず
ばつばつと舗道に雨の染み渡りひと日明ぐれば梅雨入りの報
息切れなく休まず歩みし体調に出でたる小バエを打ちのめしたり

北山雪男 残日抄

・伊

虹の橋くぐり轟く砲撃音 実戦さながら腹にすしんと
流言飛語、SNS語 方舟の林檎かたみに香り籠えさせ
他人はひととは言ふものの声高に囂る五月の蝶の如きは
昨日耳、今日また胃の腑 日替はりの痛み誤魔化し老いの起き伏し
眼のかすみ宥めて夏至の夕陽追ふ旅立ちまでの時間思ひつつ
雑草として断罪の明日とやタンボポモドキの揺るる首、首
過去なべて夢にしあればよきものを四肢にちりちり塗む鈍色

木村文子 公園

・羊

唐森のワゴンはあれど〈寂しいね〉芝を削がれた公園は荒れ野
まいまいのやさしさ輝くすべり台イサムノグチを雨が遊びぬ
初夏の雨そぼそぼふるなか大通り公園に〈無い〉芝をみつめる
不安のみたかまりゆくよこの町に聖火が来るらし見られぬ聖火が
病院に行けずに苦しむ人々を置き去りにして五輪はきたる
大通り公園の空は広々と宇宙へ続くいつものようだ
救急車が絶えずゆきかうこの町をマラソン選手は駆け抜けてゆく

草刈十郎 告既見

・世

ワクチンの接種の予報届きたる明るく続く雨の日の午後
帰省とは心うきうきふるさて今は命をかけることなり
雲白く泰山木の花白し雨のち雨にひとり酌むなり
無人駅の記事見て思ふ駅降りてずっと続きし妻秋の道
花や鳥の名前おほかた知らずして遊く春ひとり惜しみてをりぬ
暁と月と地球一直線に並びたる皆既月食夏を連れ来る
昼夜してみたき部屋あり沈黙といふ会話あり水中花咲く

國井節子

腕まくり

・春

水張田の上を飛び交ふケリ夫婦カラス相手に決死の戦ひ
永かりしコロナ禍を経て今日暗れて腕まくりしてワクチンを待つ
余所乍ら花びらこぼして合歓の花甘き香りに酔へる幸せ
お帰りもただ今もなき家に帰りだまつて鍵を開けて入りぬ
ひるがへりひるがへりつつ地をすりて燕はふくらむ土にまみれて
頼りなき明日に向かつて歩くのみこれからも又いつもの通り
週一度卓球に行くいつもより早寝早起き体調ととのへ

河野繁子

雀

・雁

巣籠りの曾孫の動画見たきのみスマホに替えず水無月のゆく
雨あがりたまりし水に二羽三羽水浴む雀のうから次々
哀しみの深くはあらずひとときを雀とすこす小さき幸せ
楽しげに水浴む雀に癒されし心すなおに干し物終わる
立ち話さえぎるよう猫の出でひとり一人の足にすり寄る
彼の人の声聞くよくな草の花をたどりて七月の道
畦をゆく土の振動俊敏にうけとめ鮮蚪のさわさわ逃げる

小林能子

「夏は来ぬ」

・羊

土砂災害警報あれば卯のはなの山辺の邑の無事を祈りぬ
伊豆山を駆けぬけしごとき思ひ出の緑の初夏の七十年前
緑明るき庭よりわれら老歌人に招かるまま書斎に座せり
黒板にチョークの文字へる「塔の上なるひとひらの雲」
熱血教師われらの村田先生ほがらかに我らと「夏は来ぬ」を歌ひき
「煙も見えず雲もなく」とだれかが口ずさみ我ら声を和せぬ
列島に災害つづき連日のニュースは祈りのときを齋す

近藤栄昭

サワークラウト

・虹

小夜更けて野菜は命の水を吐きシナシナになる漬物の初め
漬物の水上がりくる三日目がいよいよ食べごろ最初は浅漬け
漬け込んだキャベツの繊切り液滲みて増殖始める乳酸菌は
発酵の途中の味見の漬け物を一本の指は美味しいという
し・プランタラムが増殖し梅雨の夜さりにサワークラウト
キャベツ漬け開けて盛る間に生き絶えて褪せてゆきたり山吹色は
発酵の匂いたちくるキャベツ漬けいつも美味しい作る責任

近藤芳仙

コロナ禍の夏

・信

くれなづむ日差しに明かる水張田よ水面かすかにアメンボのとぶ
水無月の小草かかげる白十字ドクダミのびて黄の雌雄みす
コロナ禍と人は騒ぐもユフスゲの花弁すかせて風にふかるる
大空を音もなく舞ひ輪をゑがく鳴きのふもくりかへしをり
あさなざな交はすメールの二、三行ワクチン打つ日の予約されたか
他人とは会ふな話すな楽しむな不織布マスクに顔をかくして
忍耐の気持いつまでもつのだらう一人は死んで一人は病んだ

坂上直美

エジプト

・天

前々世前々々世はエジプト人ナイル河畔を朝明に歩く
エジプトは神々の國鷹の神 大・猫の神 鶴の神様
神は一つ太陽のみと宣言し容れられざりしトウ・アンク・アテン
男装し「私は王」と歩み出すハトシェプストの確固たる意志
私の時代は平和で栄えたわハトシェプストは誇らしく言う
美は知性クレオパトラは幾つもの言葉操り人を操る
日々沈むナイル河畔を朱に染めしばしの闇を耐えよ人々

坂出裕子 リンゴ

・洛

篠原まり子 産土

・羊

・羊

くり返し子に貰ひたる本を読む農業撤かぬリンゴ農園
トンネルの出口見えざるコロナの日リンクにかけし人のこころを
忘れるしさまざまなこと思ひ出づ外出できぬコロナ禍の日に
わが一生振り返れよと神様の賜はる刻かコロナ禍の日は
美術館博物館に行けぬこと手足もがれし人のやうなる
薄闇に覆はれ生くる日々なれど爆弾落ちて来ぬだけましか
日毎来て砂浴びをする雀二羽自分の庭と思ひゐるらむ

佐久間辰 なせ

・湾

柴田登志恵 聖火

・天

もう冬か今年も生きて何為せし思うも空し生氣茫茫
再来月はわが生まれ月よ何せんにも生氣は強く生きて行くべし
何もかも忘れ去れとか言うのかも月しらじらと空に懸かれり
限りある人生なれどまだ生きる心の底に動かぬ思い
昨日今日全く繋がりの無き日々にただ生きている哀れなわれか
なぜ生きるそんな事には関わりなく生きているから生きているのみ
哀れなるこの精神を何と見る香川先生よ叱ってくだされ

佐藤道子 不思議な街

・甲

鈴木結志 デブリ

・福

吹き荒ぶ大陸の風厭われてわが産土は黄砂となり来
父はの齢重ねて産土はやはりまぼろし『ラストエンペラー』
梅雨催いハンカチの木を憶い遣るさよならしている白いハンカチ
たんぽぽの綿毛を飛ばし振花を摘みつつ今日の外出終わる
全国一暑きわが町雨季の花耐えて重たき花魁の青
「無言館」の絵葉書出しあり書く共に嘆きし夏の日があり
マスク顔問うともなく擦れ違う星月水無月失いゆきし

散步道杜の樹陰で一休み見張りの鶴が頭上に叫ぶ
一步二歩歩めば威嚇の低空飛行私は何もする気はないのに
仔育ての鶴ならむか今朝も杜を通れば威嚇の飛行
五羽十羽群れて遊べる雀達はばらばら遊びに向かふ
コロナ死が連続一日零だつた嬉しい記事が小さく載れる
猫よりも小さき大が散歩する不思議な街よ地球は終る
遺伝子組換へかくも容易くなり果てて人も思ひのままに成るらむ

関根榮子

風 鈴

・埼

高津砂千子

無農薬

・風

四棟のテント村なりワクチンの接種を終えて梅雨空見上ぐ
聖火リレー今どのあたり高々とトーチ草咲く庭を見て過ぐ
迷いしは何処の駅か夢さめて長く旅せぬ日々と思えり
こもり居の日の夕ぐれの涼風に南部鉄の風鈴を吊るす
清楚なる白花咲けり広島の河野さんに貰いし二叉イチゲ
根づきたる二叉イチゲ梅雨の日を葉より茎立ち清々咲けり
別名の「オウシキナ」はアイヌ語とう樺太や北海道原産と知る

関根和美 味

・埼

四半刻ねるとことわり老い母の旨寝は今日も四時間を超ゆ
睡眠と睡眠の間に豪州の曾孫の動画を楽しむ母は
あの母がと思えば必ずこの身にも百へん返しに問う日来るべし
「例外のなき規則なし」英文の諺おぼえし日のまま甦る
廣東語は母のことばよ父からは日本語シャワーのごときは英語
豪州の息子は苦笑す適當と答えればまた肉じゃがレシピ
クリクリパッドに見ればよろしといふものの思い出の味子は探るらし

高尾恭子 うたかた

・大

忌み言葉さけてもの言う言葉の玻璃の輝き切り子はふたつ
逆算をして生きているたらちねの母はコロナを余所事にして
うたかたの夢の百年はそばの母は鎮守の子狐こんこん
ゆらゆらと角髪の神の影ゆれて村の庭はまあるく光る
歳月の粗き篩いにかけられてパロックパールの一粒ひかる
振りかかるこの世はあの世そら豆の莢につつまれ微睡む母は
六月のひかり崩れて紫陽花の花魁ブルーのさざ波たたず

届きたる友の育てし野菜たち泥あり葉っぱの緑みなぎる
食べ物で体こわしてそれ以来無農薬なる野菜作ると
土つきのラッキョウの皮むいている半日あめの止む気配なく
年に一度実りゆたかな畑めぐり友の丹精つぶさに見たり
万葉の講座に出会いて二十年ともに登りきますは里山
万葉の故地をたずねる旅かさね友との縁ふかまりてゆく
自分が道をこつこつとゆく年下の友に学べるもの多くあり

滝田靖子 ブルース

・新

地方紙のお悔やみの欄に受け持ちの患者の死亡を知らされてゐる
あんなこと言つてたなと思ふまだ懐かしいより悲しいけれど
常連とわれら呼びる三人の患者知らぬ間に逝つてしまへり
カーテンを開けて斜めに降る雨を見てゐる雨降る空を見てゐる
ブルースが心のどこかで鳴つてゐる雨降るやうにすり泣くやうに
「エモい」なる言葉の生れて日本「エモい」とふ花札売り出されてる
夕暮れの茜の雲の曼陀羅よ極楽淨土はきつとそこにある

竹下妙子 夏の色

・霧

杉立のあはひを抜けて射す光朝しらじらと霧流れけり
ささやくは頭上に交はす樹樹の声わが想ひはも越えてゆきたり
花粉症閑はりのなき里の子ら川原の花粉は美しき靄
山川も田んぼの苗も美しく里のあたりははつ夏の色
雨ながら日は暮れそめてひとり居の吾に降る雨藍色の雨
夕ぐれの壁をつたひてよぢのぼる朱の花もてるノウゼンカズラ
コロナ禍に商店まばら人まばら見上ぐる月夜のしづくに濡れむ

田 土 成 彦

堤

・宙

虎 谷 信 子

友 よ

・伴

淀川に架かれる二つの橋の間の散策ルート風に吹かれて
つきの橋までの一キロ夏草のいきれ収まる暮れ方を行く
堤防より見る水面と町並みと天井川の言はれ確かに
この川を眺め続け半世紀姿はりしはわが身のみならねど
窓を開け夕風を待つやさしさよ過ぎゆくときの一齣として
にぎみたま荒魂またくしみたま人は幾つのたましひ持つや
円盤形UFOがこの世のものでない色を変へつつ飛び去りしとか

田 土 才 惠

予防接種

・宙

頑なに拒否すること孤立する予防接種の一つの被害
怯える副反応のあることも忘れてならじ予防接種禍
いかほどの効果か知らず人並みに予防接種の二回目を受く
軽き音立てて届きし荷のなか身スティック糊の一本のみが
母の日に届きしから一鉢の花生き残りたりコロナを超えて
買い物の多くはネット今の世を知らぬ早逝したる妹は
パソコンにたれぞ居るらし休憩をそろそろしたらと文字表れて

玉 井 綾 子

深 層

・羊

脚の怪我で手術せしとぞ友入院。夜更けて目さめあんするばかり
一人居の友の容態 わからぬまま。コロナ禍災 及ぶさひしさ
朗讀といふ勉学をみちびき来し 君の一代。共に卒寿すぐ
梅雨入りの頃ともなれば 土じめり。鶏頭・つめきり 芽は限りなし
柿の花散りばふ道は わが道か。土蔵の白壁 一角が落つ
柿の花拾ひ つなぎし幼き日 さびしさはなほ 黒き木肌に
証のこと しげりひろごる柿の木樹。今は人手のいくつかの地に

中 島 央 子

カツサンド

・森

身体の芯くづるるやうに聴きるたり緊急事態延長三度目
つつしめの御達し三度勝負めしならねと昼のカツサンド食む
わが膝に半身あづけ眼の犬降りみ降らずみ無聊をわかつ
六脚の椅子ある卓に子と二人その他たちまち物置となる
立ち上がりなぜ立つたかを忘れる笑止の沙汰と笑つてをれぬ
身うごきのならざる現天を指す柘榴は朱の花を満たせり
旅の日は過ぎ去りてのち鮮やかに杉原千畝の質素な机

中 島 義 雄

妹竜く

・岡

マスク下にあきとうことの増える梅雨白き不織布の覆う深層
急な雨 君の小さな折りたたみ傘に隠れるソーシャルディスタンス
同僚を上から目線で踏み出す彼を男と意識してより
君のこともっと知りたし、でも吾にマスク外して向かう明日なし
マスクして顔の半分ない君に抱く慕情の末ははるけし
会食も腕組みもせぬコロナ禍に恋うる相手はプラスチック製
マスクした君が好きだった鼻と口と本心覆つて笑顔の君が

羽搏ちひとつ掠め去りしは何ならむ薦は声なく空に消えたり
妹はこゑなく逝きぬわが癌の様を問ひ来しは一ヵ月前
ただ一人の妹逝けりひとすぢの蟋蟀の声長くつづけり
こゑもなく妹の息絶えてけり女郎蜘蛛ひとつ巣を急ぎつ
「宗教とは懺悔」と常に言ひてゐき如何なる懺悔積みて逝きたる
前世來世ただ茫々とあるならむ水結蜜柑の香をたてまつる
病む夫を残して妹の息絶えぬ祈りもて編みしほーター成らず

永塚節子

雨のち晴

・銀

うつうつと過ごす雨の日焼き上がるパンの匂いに呼びざまざる
雨の日の楽しみはこれ帰を上のたつむりの数今日十七四
背に負うかたつむりの殻直径は一センチほど生まれしばかり
水の中刃の上もなんのその人間よりも強きかたつむり
スーパーに手を伸ばし取るは「くめ納豆」母生れし地のこれが一番
路上歩く白鶴鶴を呼びいるは母鳥ならん電線のうえ
鳴きかわす親子に顔を上下させ遊ばれいはわれかも知れぬ

仲西正子

喜屋武岬

・沖

戦場に追わればろぼろ引き摺りて人等が命を絶ちたる岬
喜屋武岬の切り岸に立ち見下ろせば無音はやがて悲愴なるこえ
花ゆうな喜屋武の岬の切り岸に落花してゆく黄に咲きしまま
慰靈の塔めぐりきたれば眠られぬ夜半に捲る「蚊帳のホタル」
泥まみれ吉永小百合の眼が光る「ああひめゆりの塔」は慘烈
雨が降る慰靈の日なり泥濘の場面の多し「ああひめゆりの塔」
生き延びし命なれども手榴弾を握らせ終わる戦争映画

白子れい

梅雨

・洛

気候不順ものごとなべて狂いいて梅雨の最中に驚の声
からみ合い縫れあいつつ白き蝶あじさいの厚き葉かけより出す
蝶すらも絡みあいいるに絡み合う相手もたざる吾の淋しも
続きいる自肃の日々にて淋しさを語るは夫の待ちいる墓前
門前に涙と咲きいる夏椿白きが無言に見送りくる
にび色のおもき梅雨ぞら頭に受くも心はつねに明るく保たん
椅子にたち梅とることの難くなり今年は人に頼むほかなし

浜本英美

底辺

・夢

文学の底辺を支えてきた誇りさやかなれどありてわが日々
かなわぬと思いつつ抱くこの思い五ミリが程の芽立ち見しあと
大方は夫をたよりの日々にして時には自らを主張しており
今すぐに着ることもなき服あまた部屋に吊して楽しみとする
「可愛い」とう言の葉今は若者に使うことばかりこと可愛ゆき
母さんが今日は来ないつぶやきぬ早く前向きにならねばならぬ
三十年もののテーブルサンゴ鏡でおりぬ眼れぬ夜の収穫として

ばかりようこ

立待の月

・鹿

階段をおりゆく背に友の言う「貴女かの子によく似てるわねエ!」
若き日に友の言いし声よみがえるああんな日もあつたっかけか
古本屋にかの子の本を探したりたぐりよせるようによせられるよう
わが友に見透かされいし魔性とは年経ても尚衰えぬとはまあ
危うさを胸にくゆらせ人肌のぬくとさを恋う立待の月
さみいと本音をそっと咳きてたましいのかけらをつなぎあわせいる
病むとうを引き替えてどっぷりと神はくださいました考える時間を

浜谷久子

力

・地

鉄豆はおさな葉大きく逞しくただ伸びるだけ恐れを知らず
おさな葉を縫つて伸びくる蔓いく本おのが力を迷わぬ力
鉢豆の蔓細くして捲む空風と光を巻きとりながら
脚の数駆使する毛虫素早さはわたしを脅威と見て取る数秒

柿の葉にぶら下がる毛虫五センチを火ばさまで取るも途方に暮れる
逆立つ毛路上に放てばしばらくは動かず騒がず辺りを窺う
通過するタイヤすり抜け疾駆する毛虫は遂に草の原にと

檜垣美保子

霧

・昂

藤森巳行

ワクチン接種

・銀

山は雨おんなが五人あすまやに雨の音きく飴まわしつ
誰が嘆きならんや山の霧ふかく弱音は吐かずのぼりてくだる

すっぽりと霧に巻かれてすぶぬれの耳に聞きたる夏のうぐいす
蛇の池のかたち荒漠とみえざれどしんとしずかなすいれんの花

霧ながれ全容あきらかならずして黄の睡蓮の咲くあたり過ぐ
死者生者なべてかそけし霧のなか地蔵のあたまの落ち葉はらえば
下草の刈られあかるき杉林ささゆりが二本うつむいて咲く

福田庸子

おもかけ人

・今

満たさるる思ひしみくる水張田は今年の苗をやさしく抱く
はるかなるおもかけ人の顎つたへ四照花芽ゆ小賀玉の香も
年毎に代はる作物丘畑の麦秋となる晴天の日日
子の居らぬ校庭を占むる草の色廢校の日はいまだ浅しも
春の日を存分に受け身を伸ばす雑草の自由のまぶしきものを
外国産ワクチンを次次とり寄せて何が何でもオリンピック開く
コロナゆゑ支援金申詣切なきと幼なじみの山の酒屋は

藤田美智子

悪役

・新

稜線を隠せる雲に動きなし色の濃淡はつかに交へて

泣きながら笑ふこと久しくなかりしと塩餡パンを食みつつ思ふ
青空が拘繩の棘を銳くしわれのこころも敏感になる
からみあひつつ空にのぼりてゆくやうなブール授業の子どもらの声
夜の道を戻りつづばそりと口にせり雨に濡れたる樹皮のにほひを
責めたつるわれと黙して聞く君と 悪役はもう決まりつて
誰かに追はるる夢をみしとぞ追ふ夢をわがみしことは告げないでおく

星一つただ一つのみ眼前に輝きるたり梅雨の雲間に
遠くより励ます君のサインにや「頑張つてますよ、安心してね」
海洋性と教へられたる列島の気候はもはや大陸性に
朝夕と真昼の温度差十度ほど着たり脱いだり一日に幾度
梅雨明けは七月初旬と ワクチンの接種二度目は真夏日ならむ
橋上を年ごと飾りし大輪の花菖蒲は今年みな片付けられて
薄雲をかすかにまとひ十二夜か 仰ぐ夜更けの白き月かけ

牧田清子

星一つ

箕面彦

・大

遠き日に祐生が空を蹴り漕ぎしぶらんこにいま子らの声なし
梅雨晴れの日に照らされて光りる黄楊の葉陰を黒き虫這ふ
温るやうなモチノキの葉がそよぎる木陰にしばし抱かれてゐるむ
桜木のみどりあたらし空を覆ひ雨あがりの森風しづかなり
卯の花が風に揺れみて昼だけぬひととき道に人影の絶ゆ
一面のみどりのあはひゆかすなる瀬の音聞こゆ 箕面は五月
試験管かざしてすつくと今日も立つ野口英世の銅像はあり

ワクチンを打つて打つて打ちまくる川口市長のコロナ対策
我よりもいつも先ゆく妻なりきワクチン接種も六月終へたり
予約した時間来るまで心鎮めワクチン注射の受付を待つ
看護師にどちらの腕に打ちますか問はれて思わず左腕差し出す
十五分ストップウォッチ持たされてブザーが鳴れば接種終了
二回目の接種を終へた七月十日我が人生のワクチン記念日
二回打てばひとまつ安心二年越し妻とのデートアウェットモールで

ワクチンを打つて打つて打ちまくる川口市長のコロナ対策
我よりもいつも先ゆく妻なりきワクチン接種も六月終へたり
予約した時間来るまで心鎮めワクチン注射の受付を待つ
看護師にどちらの腕に打ちますか問はれて思わず左腕差し出す
十五分ストップウォッチ持たされてブザーが鳴れば接種終了
二回目の接種を終へた七月十日我が人生のワクチン記念日
二回打てばひとまつ安心二年越し妻とのデートアウェットモールで

松浦禎子

野性譜

•

三浦好博 神風

• 6

辻治昭和四二年に揮毫せし枕頭の小屏風詩の「野性讚」

真剣に生き真剣なる恋のため人生の半ばを捨て去りし人
人生の盛んなる寺豆けい野鳥の会を率ゝノ台も

辻邸を囲む土塀はこの主のたっての望みとぞいにしえ匂う

辣腕の外科医でありしその最期愛を共にすかいなの中で
井戸水を汲みて草花育てたる弥生さんの生き見守りたまえ
わたくしの枕頭の夢は一夜にて辻造氏に会いすことなく

松瀬トヨ子

若夏

•
油

宮本靖彦

百合の花

凌

生け垣にクロトンの葉の豊かなり赤瓦屋根の紅型工房

甘酢の中にはみどりがこと閉じこめたり若夏のみのり吾が家のきゅううり
どっしりと土に掘り出す薩摩芋さらさらが良い土も血液も

リハビリは結果ではなく努力なりと文字太々と男の書状
伊集月桃テッポウ百合の咲きこぼる鎮魂の島の黒き日傘
林道の彼方此方にこぼれるは木の香花の香つりずんの風
鳴りやまぬ喝采のこと空に舞う画面に見入るヤマトのサクラ

松永智子

2

• 11

三好聖三
夢夢

伊

歩くことかなはぬ身なれば行く人のゆるき歩みをながく見送る

富士山の頂に立ち暁光に会ひし日のありときにふりむく
酸素不足にあへきつつ入る山小屋 落伍者われは汁粉に涙す
はるかなる山をはなるる朝の日を富士山頂に立ちて見たりき

下山は得意なるわれ須走口へいつきに駆け降りなかま待ちた
半世紀前の富士の頂に立ち仰ぎたる空なほたかし
衝の音ビルの音の絶えしままひむがしの空明けくるを待つ

からからりからからからりからり唐獅子牡丹の歌は聞こえず
ぐだぐだと巨漢の電車が入り来るプラットホームを侵しながらに
七首を念入りに研ぐ夢の奥のべらぼうの女男立ちならぶ
母親を犯す夢から覚めではや畠の水を逃がす手立てを
友人の部屋を訪ねてゆく道の泥川ときに泡を吐きたり
刑務所のほどりを抜けて河辺まで貨物列車が夜を打ち抜く
「叔父」の死を告げられている電話口（流浪のひと）の背しずかなり

雨あがる水溜まりには空映し虹のごとに油膜が流る
雨蛙の二匹がピンクの大輪の薔薇を城とす花も笑みる
回覧板読みたるあと消毒も板につきたる哀しき時世
神風の吹いてコロナの終息を願へる神国我ら三度目
カタツムリ助けに助け一段落帰りは上を向いて歩かう
光りつつ雲が行くなり梅雨晴れの空と林を動かしながら
杖の先の花の名前を答へけり清掃ボランティアの役目の

၁၂၆

御代田澄江

あぢさる公園

・茨

市原やよひ

つばめ

・萬

年経りし藤棚の柵くぐり抜けここより保和苑あぢさる公園

水戸黄門の格さんの墓あり入口近く 水戸のにほひの芬芬として

噴水は扇形に噴き木樹美し山あぢさる通りは斜面ぬかるむ

孔雀ケージ雖従へし牡孔雀大羽根広げ人を威嚇す

紫の額あぢさるの濃き藍にわれの願ひを掛けぬ保和苑

輸入種アナベル白あぢさるの大き毬咲き広がり白く輝く

谷深く下り行く足下苔柔し山村暮鳥の墓もなつかし

茂木斌

わが遊園地

・埼

知の巨人と呼ばれし立花隆さん八十歳の訃は惜しまる

知の巨人は立ち食ひそばと牛丼を愛せしとかやそこのみが似る

冥界にてはやペン取りて傑作をと三界巡りの取材しをらん

無料にてお店ぐるりんタクシーが駅より乗れる高崎の街

無料タクシー見かけ手をあげ合図せばコースのうちの乗降自由

コロナ禍のうちにあれども信州のサクランボ狩り晴れてこよなし

歌ひとつ探してめくる閑日の万葉集はわが遊園地

もとむらしげと

在りし日には

・そ

病院とグランドのみと決めている母の運転の終わり近づく

半世紀乗りきし車と縁を切る八十路半ばの母の決断

桜ちる今日こそ母に会いにゆかむ心の箱を少しゆるめて

春風に吹かれつづく川土手に母はときおり歩みを止むる

子や孫の寄りあう盆に母ひとり生き抜くためのマスクしております

我の知らぬ人のことなど喋りたる母といで我の心は速し

心配性の母を叱りて帰る夜さびしげに笑む母をのこして



遠見ゆる山は秩父連山か夫を置きたる病室の窓
大リーグ始まる頃と告げに行くベッドに居ない夫を忘れて
家中の話題集めて生まれたるつばめ黄色の口を覗かす
ひな五羽がきっしり詰まる巣の中を自撮り棒が写し出したり
つばめ来るは吉事と聞けり餌を待つひなの鳴き声ひねもす響く
燕尾服の姿になりし子つばめのある朝突然いなくなりたり
手をかける事なく巣立ちしつばめ達空の巣見上ぐ日に幾度も

久我田鶴子

夏至る

・羊

明珍のひびきのなかに風がるて忘れたやうにもたてつづけにも
ひよどりのけたたましさに混じること等間隔の单调きさむ
飛びながら声をこぼすはつばくらめ今年の巣立ち混じりてゐるか
土手をゆく京成電車と高架ゆく総武線のおと聴き分けてゐる
どこかしら壊れたやうな音たてて走る電車にめうな肩入れ
見なくなつたと言はれた雀にぎやかに十二階にも姿をみせる
なにかしら物色してはベランダの縁に御返し 律儀の雀